

私が税を意識したのは、歴史の授業で平安時代に租・庸・調・雑徭が人々に課されたと習ったときです。いままでの知識で税を振り返り、これからの税について考えてみました。狩猟採集生活から農耕牧畜へと生活様式が変わり、人が集団で生活して社会をつくり始めたころは、生産性が低く、社会に属する全ての人々が農耕牧畜に携わらなければ生活ができなかったため税はありませんでした。しかし、生産性が上がるにつれ農作業等に従事しなくてもよい支配者階級が現れ、税という仕組みを作りました。また、余った米などの生産物は財産となりました。平安時代は貴族が税の見返りに人々の生活や財産を守らなかったため、荘園ができ、貴族が税を獲れなくなると、貴族社会は終わってしまいました。税の徴収は納税者への見返りがなければ成り立たないのは、今も昔も変わらないと思います。その後は、武士が台頭して封建時代となり、税の獲得者は領主となりました。ヨーロッパの市民革命や産業革命後の国際競争の波が押し寄せ、明治政府が確立されると、税は物から貨幣に変わりました。国民主権の立憲君主制となった今でも税は貨幣で支払うことに変わりはありません。税の対象という面では人単位、耕作面積単位など人の能力や生産高を考慮しない税負担から、税を貨幣で納めることになり、主に所得単位、消費単位へと人の活動に応じて負担することになりました。明治時代以降直接税の比率は税収に占める割合が高かったけれど、少子高齢化社会となり社会保障の重要性が高まった現代は、消費税などの間接税の比率が高まっています。

このように、社会の仕組みや時代によって税の形や負担の仕方は変化しています。国が存続するために税の在り方は変わっていくものと思います。しかし、昭和四十年代から税収よりも歳出が増え、その補填のため発行した国債は、世界でも類を見ない額に高まっています。今世界的に流行しているコロナ禍への対策でも、税は事業者の休業補償や国民への十万円給付などに使うお金は、税を先取りした赤字国債で補うとニュースで見ました。私は、税の歴史を通じて、税の先取りである国債の発行については疑問を感じています。国の予算不足を国債で補うことは、次の世代に借金を負わせることだと思います。歴史を振り返ると、封建時代には徳政令で借金を帳消しにするといったことがありました。しかし、外国でも日本の国債を買っている現代では、借金帳消しは信頼を失い、国が破綻することを意味するので、とてもできないと思います。今コロナ禍で新しい生活様式が推奨されていますが、税収の範囲内で国を回すことを考える時期ではないかと思います。税が足りないなら増やすことを考えなければなりません。今の大人には、自分たちの時代のツケは自分たちで解決し、次代にはきれいな状態でバトンタッチしてほしいと思います。